

江戸時代人は勉強大好き

江戸時代には、幕府の命令は文章(御触書)で伝えられたため、武士から町人、村人まで、読み書きは必要だった。

とくに経済の発展した江戸では、大きな商店などに奉公するには「読み書き・そろばん」が必要だったので、みんな熱心に勉強した。

江戸時代の人は、どんな勉強をしていたのかな？



<人気だったのは中国の学問>

多くの人、社会での人々の役割を教える、「儒学(漢学)」という中国で生まれた学問を学んだ。儒学のなかでも、とくに身分や年上を敬う礼儀など、社会の決まりを大切にす「朱子学」は、身分制度をつくって世のなかを治める江戸幕府に重んじられた。



儒学を中心に教えていた昌平坂学問所の授業風景。

武士の子どもが学んだ

昌平坂学問所

幕府が経営した学問所。身分制度の頂点に立つ武士には、世の中を治めるための学問が必要だった。ここで行われる役人になるための試験は、身分の低い武士にとっては、立身出世のチャンスでもあった。現在、JR御茶ノ水駅近くの湯島聖堂があるところにあった。

みんな、おとなっばいなあ。



武士の子どもが学んだ藩校と私塾

江戸時代には、身分によって勉強するところが分かれていた。武士の子どもたちは全国の藩がつくった「藩校」か、学者が個人で開いている「私塾」で、儒学をはじめとして、医学や武術などを学んだ。のちには町人の子どもも、藩校や私塾で学ぶことができるようになった。

江戸時代のおもな学問

名前	大きな特色
儒学(漢学)	中国から伝わった学問。礼儀作法や社会の決まりをだいにする。
国学	日本で書かれた「古事記」や「万葉集」などの古典から日本人の精神を学ぶ。
蘭学(洋学)	オランダから伝わった西洋の学問。医学や科学の発達を助けた。

文字が読める人の割合は世界のトップクラス!!

江戸時代は平和が続いて経済が発達し、物売り買ひするときに契約書を交わすことも多かったので、文字の読み書きができなければ生活できなかつた。大店(→p.36)に奉公したり、出世するためにも読み書きは必要だったので、親は子どもたちに勉強させた。また、印刷技術の発達で、本を安く読めたことも、人々が文字に親しんだ理由だった。



わたしは人の個性はいろいろだと考えます。

能力があれば出世できる「足高の制」(→p.47)は、徂徠先生の提案です。



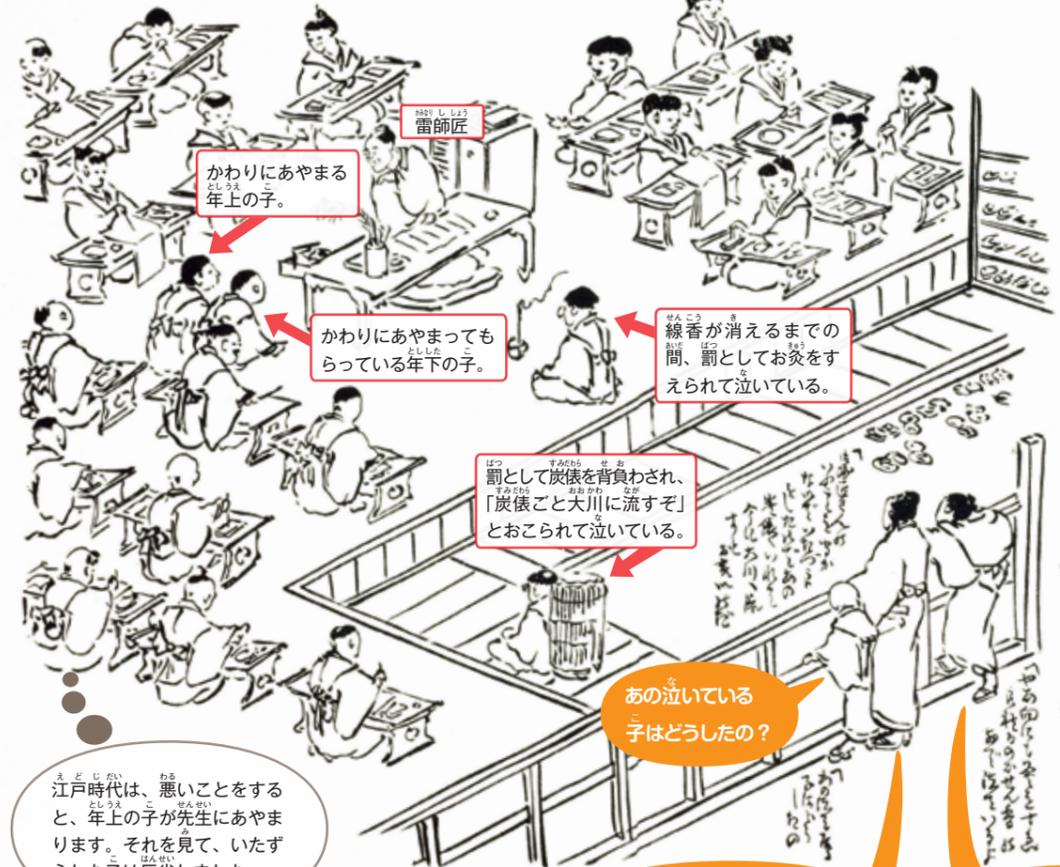
茅場町にあった「藺園塾」で、朱子学とはちがう「古文辞学」を教えた。荻生徂徠は8代將軍吉宗(→p.46)に重んじられた。

町人や農民の子どもは「寺子屋」へ

町人や農民の子どもたち、身分の低い武士の子どもたちは、ほとんどが、寺子屋(当時は手習所といった)で勉強した。子どもたちは、寺子屋で自分が必要な勉強をした。

雷師匠が開いていた寺子屋の授業風景。日本橋佐内町(現・日本橋一丁目)にあった。先生はとても厳しかったので「雷師匠」とよばれていた。

ぼくたちの授業と比べてみよう!



かわりにあやまる年上の子。

かわりにあやまってもらっている年下の子。

線香が消えるまでの間、罰としてお灸をすえられて泣いている。

罰として炭俵を背負われ、「炭俵ごと大川に流すぞ」とおこられて泣いている。

あの泣いている子はどうしたの？

江戸時代は、悪いことをすると、年上の子が先生にあやまります。それを見て、いたずらした子は反省しました。

お師匠さんの言うことを聞かないでいたずらをしたので、「炭俵に入れて大川に流すぞ」と言われているんだ。

やあ、向こうにもお灸をすえられているのが、線香の前で泣いているよ。

※幕末～明治初期の風俗をえがく『江戸と東京美見画録』より

勉強の基本は「読み・書き・そろばん」

寺子屋の授業は、「いろは」や地名、数字などのやさしいものから、身近な御触書を集めたような難しいものへと、個人の理解度に合せて進んでいった。教科書は「往來物」とよばれ、内容にはいろいろな種類があった。

やさしい ↑ ↓ 難しい



『東海道往來』
「東海道五十三次」の地名を勉強する教科書。語ろ合わせて覚えられるようになっている。



『女消息往來』
女性のための手紙の書きかたの例を集めた教科書。

『絵入り商売往來』
「商売往來」は、商売に必要なことながらを学ぶ。上級者向けの教科書。

にぎやかで楽しそう!



寺子屋での授業
寺子屋には時間割がなかった。みんなちがうことを勉強して、わからないところを、先生に質問にいった。授業中は、けんかやいたずらも多かった。

